

都・建設予定地 生活記 (12)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕の生活記。

僕の部屋は、シャワーはついているのだが、給湯器がついていないので年中水しか出ない。年中、というか、夏の間は蛇口を捻れば自然と40度くらいのお湯が出るので、ある時期から水しか出なくなる、と言った方が正しいかもしれない。ともかく、水シャワー自体はそこまで嫌いではないし、グジャラートという土地柄、暑い日々が続くのでそこまで困ることもない。

だが、限界というものはある。蛇口を捻り、ちょっとだけ水を出しっぱなしにして、水とぬるま湯の間くらいになったらシャワーを浴びる。それが辛くなる瞬間がやってくる。「ギリギリセーフな水温」から「ギリギリアウトな水温」に変わるタイミングだ。そうなると僕は「そろそろ冬だなあ」などと、水シャワーを木枯らしの代わりみたいに思いながら、長らく仕舞っていたバケツ用の電熱コイルを取り出すのだ。

誰が言いはじめたのか「インドには季節が三つある。Hot・Hotter・Hottestである」という冗談があるくらい、インドといえば夏しかない、というイメージがついている。テレビの中だけでインドを知っている人からすれば、「インドはいつでも暑い国」だ。もっとも、住んでいたって、大抵は「今日も暑っちなあ」としか思わなかったりする。

もちろん、インドの冬は日本に比べたらさほど寒くもないし、あっという間にまた気温が上がってくるのだから、「いつでも夏」と言われてもしょうがないのも分かる。分かるのだけれど、水シャワーの冷たさとか、真冬に乗るオートリキシャーの、身を切るような風を知っていると、「いや、インドだって寒いんだけど」と擁護をはじめたくなってしまう。まあ擁護してみても、「アーメダバード 1月」で検索した時の最高気温が30度では「夏じゃねえか！」のツッコミで終わってしまったりもするのだけれど。

外国で、季節を感じるのは意外と難しい。

季節は気温だけで決まっているわけではないのだと思う。

日本にいたら話は簡単だ。幼い頃からずっと季節に囲まれている。桜がそろそろ咲くから、祭ばやし聞こえるから、キンモクセイが香るから、木枯らしが吹いたから。そういうもので今の季節を感じる事が出来る。でも、それは、外国には持ち込めない日本の季節感だ。

例えば、マンゴーが実りはじめたから。空が雲で覆われたから。爆竹の音がし始めたか

ら。そうやって季節を感じ取れたら、それこそが、きっと本当にこの国を知っているということなんだろうな、と思ったりもする。

仕事でインドに来て丸2年。留学も合わせれば3年になった。

今のところ、「水シャワーを浴びるのが辛いから」というのが僕にとっての冬の合図になっている。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。